

## 「引越し」

ある町に一人の学者が住んでいた。しかし彼の両隣は よりにもよって鍛冶屋が店を開いていた。

かれは、常々「この二人が引越しをしてくれたなら、二人に一杯おごってやってもいいんだがな」と言っていた。

ある日、二人の鍛冶屋がそろってやって来た。

「この度私たちは引越しすることになりました。かねがね 私たちが引越したら一杯おごるとおっしゃってましたのでご挨拶に伺いました」「いつ引越しされるんですか」「明日です」

学者はおおいに喜んで早速二人に酒をふるまった。「それで、どこえお移りになるんですか」とたづねると、「いえ、近くで私はこの人の家へ、この人は私の家へ」



## 「本が低い」

受験勉強のために、地方から出てきて寺に寄宿している学生がいた。勉強はそっちのけで毎日遊び歩いていた。

ある日、昼過ぎに突然帰ってきた彼は、寺の小僧さんに、「おい、書物を持ってきてくれ」

小僧が「文選」を持っていくと「これは低い」次に小僧が「漢書」を持っていくと「これも低い」

小僧は困ってしまったが、今度は「史記」を持っていったら又また「これも低い」

困り果てた小僧は急いで和尚のところへすっこんで行った。

小僧の話を聞いた和尚は「おかしいな、その三種の書物の内一つに通じているだけでも、たいした学者といわれているのにどうしてどれもこれも低いのだろう」

理解に苦しんだ和尚は学生の部屋へ行って聞くと、「昼寝の枕にするんですよ」



## 「牛泥棒」

うしろ手にしばられて引き立てられていく男に、その男の友人がたずねた

「おい、君はどんな事をしたんだ」「いや、何もしてないんだ。道を歩いていたら一本の縄が落ちていたんでついそれを拾ってしまったんだ」

「縄を拾ったぐらいで、警察は君を捕らえたんだ」

「それがその縄の先に物がついていたんだ」

「どんな物だったんだね」

「それがサ、一頭の子牛のヤツだったんだ」。

